

# ポスターセッションにおける 会話場支援者の行動分析

森田 幸輔<sup>†</sup> 酒造 正樹<sup>†</sup> 徳永 弘子<sup>††</sup> 武川 直樹<sup>††</sup>

<sup>†</sup> 東京電機大学情報環境学科

<sup>††</sup> 東京電機大学システムデザイン工学部

## 1. はじめに

学会などの場において、ポスターによる発表形式が取られることがある。ポスター発表においては、発表者は研究内容を発表するのみならず、できた会話場を維持、運営する能力が必要となる。本稿では発表のみに集中できる空間を構築するため、ポスター発表の場をマネジメントする支援者を介入させ、その行動と効果を検討する。

## 2. 関連研究

Kendon は、多人数会話場の参与構造をF陣形という概念で説明している[1]。F陣形は図1のように、一人一人の身体の前に広がる空間（操作領域）をO空間、身体を含めたO空間の外側の領域をP空間、後方に作られる待機領域のR空間として定めている。本稿ではこの概念を援用し、ポスター発表における会話場の遷移や参与する人の身体配置を分析する。

## 3. 実験

### 3-1. 実験手法

大学の研究室ゼミメンバーの研究発表をポスターセッションの形式で実施した。発表は4名の学生と1名の教員がA0サイズのポスターを掲示し、40分間で発表と質疑を行った。発表の様子は、3名の発表者を中心に、多角度から映像を収録する。また発表のうち20分間は、1名の教員が支援者として、場全体のマネジメントを行った。支援者への教示として、長く同じポスター発表にとどまり続けている聴講者に対して会話場からの脱退を、遠くからポスターを眺める人物に対しP空間への加入を促すよう伝えた。実験後聴講者と発表者には質問紙による調査を、支援者にはインタビューを実施した。

### 3-2. 実験結果と考察

最も多かった支援行動は、会話場から脱退した聴講者に「この発表聞いた?」「空いてるよ」等の発言を行い、さらに手振りによってポスター発表のP空間へ引き込もうとする行動であった(図2)。

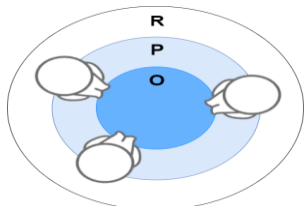


図1. F陣形のイメージ図

加入支援について、支援者がP空間でスペースを確保し、脱退することで、聴講者が空いたスペースへ加入するシーンが観察された(図2)。この行動について、支援者は「意図してやっていなかった」と述べた。支援者が無意識に支援行動を行っていたことから、支援行動をより細分化する必要がある。

一方、脱退支援については観察されなかった。会話場から脱退する直前の聴講者の行動では、身体や頭部をポスター以外の方向へ向け、視線を外す動作が観察された。これは、聴講者による脱退の意思表示と考えられる。支援者は、「映像を見れば聴講者の動作が分かるが、実験中は気づかなかった」と述べていた。以上のことから、聴講者の脱退を志向する態度を支援者は気づきにくいと考えられ、聴講者の脱退シグナルについて検討が必要であることが分かった。

今後は、音声、位置センサ、加速度センサなどを用いて定量的な行動データを分析し、聴講者の加入・脱退行動モデルとそれに対する支援者行動を構築する必要がある。支援者の負担を考慮し、将来的には、ロボットによる会話場支援も期待できると考えられる。



図2. 支援者の手振りによる支援(赤丸:支援者)



図3. 支援者が聴講者にスペースを譲る支援(赤丸:支援者)

## 参考文献

[1] Kendon, A., "Conducting Interaction: Patterns of Behavior in Focused Encounters," Cambridge University Press 1990.